

Title	三田派の経済史家
Sub Title	Leaders of economic historians at Keio University
Author	速水, 融(Hayami, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.35(209)- 40(214)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田派の経済史家

司会 ちょうどいまの林先生のお話の中にもございましてたけれども、幸田先生の時代に経済学部の福田徳三という先生がお出でになりました、経済史を教え、このすぐ後に今度は滝本誠一という方が講義をされ、福田徳三さんのたしか一番最後の授業を慶應で聞いたのが野村兼太郎先生かと存じます。ちょうど大正の後半からごく最近まで、慶應義塾の三田の山の上にいたもう一つの大きな歴史の山というのは、経済学部の野村兼太郎先生の研究、それから野村先生のもとでドイツ経済史を習いました高村象平先生、こういう方につきましてのお話を、両先生から親しく習われました直弟子の速水融先生からこれから伺おうと思います。なお、速水先生はたしか昨年の秋まで慶應義塾大学の経済学部の教授をされましたけれども、ただいまは慶應義塾の客員教授をなさつてい

らっしゃいます。

速水融

速水 私は実は塾の史学科出身ではございませんし、おまけに経済学部を出ましてからしばらくよそにいて、塾に戻りまして、経済学部にずっと奉職しておりました。さらに昨年、定年前に京都の国立の研究所に移っています。そういう観点からすれば、本日ここでお話をする資格はあるいはないのかもしれませんが。三木先生に悪く言えばだまされまして、ワインか何か飲みながらやりまからとおっしゃるので出て来たのですが、見たところワインの姿は全然ない……。 (笑) しかし、いまご紹介いたいただきましたように、野村兼太郎、それから高村象平両先生のもとで、歴史に近い経済史を学んだ者として、このお二人の先生、あるいは史学科の先生との関係等につきまして若干お話をしたいと思います。

その前に、実は経済史というのが日本では伝統的に経済学部におかれています。ごく最近、アメリカでは全く違う理由から経済史は経済学の一部である、ということでは経済学部におかれるようになりましたが、それまで欧米では史学科の一部として位置づけられて来ました。経済史は、経済学と歴史学の両巨人の間にいるギリシャの乙女のような存在だ、などという人もいますけれども、そういうことを言ってしまうえば、政治史とか法制史とか、社会科学の中での史と名のつくものはみんな乙女であることをそれぞれ主張するでしょう。

経済史に限ります限り、現在のアメリカの経済史のように、新古典派経済学の理論を使って過去の経済的事実について分析するというような経済史になれば、これは経済学部にあっても仕方がない。しかし、野村、高村両先生、あるいは私自身も実はそう思っておりますけれども、どちらかと言えばたとい数量的方法を使おうとも歴史学の一部、あるいは歴史学の一つの分野として、難しく言えば個性記述的なのというか、一般法則と言うよりはむしろ個別的な面を追求していかうとする限り、経済史はむしろ史学科の中にあつていいのだとさえ思っているくらいであります。

そういうわけで、私、三十年余りいた経済学部から、京都にできました新しい研究所に移ったのですけれども、そこでは歴史のほうに移りまして、やれやれと思っております。経済学を称して灰色の学問、あるいは憂鬱の学問と呼んだのはカーライルでありますけれども、陰鬱な学問からようやく解放されたという気持ちであります。

野村兼太郎先生もそういう思いがあつたのではないかなと思います。先ほど名前の出ましたように、福田徳三教授が一九一八年に塾を去られるわけなのですけれども、それはまさに野村先生が塾を卒業され、助手になられたその年であります。ちょうどそこで、これは全く歴史の皮肉でしょうけれども、一種の連結がされているわけがあります。

大正のこの時期は、いわゆる大正デモクラシーの時代でもありましたし、いろいろ新しい考え方が出てくる。白樺派であるとか、あるいは西南ドイツ学派の考え方も、あるいはマルクス主義的な考え方も出てくるというわけで、日本の思想界が非常に沸騰した時期でありました。また現実の社会も、第一次世界大戦、それに続く恐慌とか社会運動とか、ソビエト革命とか、いろいろなそういう変動が周辺に起こりまして、あるいは日本自身に

も起こりまして、大変な時期であったと思います。

そういう中で野村教授は卒業されて、しばらくは歴史哲学を研究されています。これは著書にもなっているのですけれども、むしろその方面の研究は早く捨てられました。この転換は、野村教授の一九二二年から三年間、ヨーロッパに留学され、主に英国のケンブリッジ大学におきましてイギリス経済史を研究をされる、その過程に起ったのではないかと思えます。その間、野村教授は大変悩まれたり、行き詰まりを感じられたりしている、そのことは著書『欧洲印象記』（一九二七年）から窺うことができます。関心のある方は『三田学会雑誌』という、慶應義塾経済学会で出しております雑誌の五十三巻の十号、十一号（一九六〇年）が、先生の追悼号でありますけれども、載っておりますのでお読み下さい。

とにかく、そこでイギリスの学問に出会って、それまで日本ではどちらかというドイツ流の哲学の影響をかなり強く受けておられたと思えますけれども、イギリスの経験主義的な歴史学に出会われた。そこでイギリス経済史、特にイギリス資本主義の成立・発展を、都市あるいは商人階級の成立という切り口からながめていこうという決意を持たれたようであります。そして帰国されて

からは、商業史、経済史、あるいは経済思想史の講義を担当されるようになります。

最初、帰国されてからすぐは、イギリス経済史の論文を幾つか出され、それは博士論文に集成され、著書『英国資本主義の成立過程』（一九三七年）にもなっています。しかし、大体一九三一年あたりから日本経済思想史、特に江戸時代におきます経済思想の成立と展開というような面に関心を持たれまして、たくさんの論文を書かれています。ちよつと塾との関係の深い、先ほど名前もちよつと出ましたけれども、滝本誠一氏が『日本経済叢書』とか『日本経済大典』（全五十四巻）を刊行されました、先生にとってはそういう史料を身近に読むことができるという時代でもあったのかもしれない。もつとも先生は、そういった印刷史料に往々見受けられる誤読を指摘され、なるべく原本を用うべきことを強調されましたけれども。そういう一つの時代を経て、ようやく私が知る限りでは本来のお仕事である日本経済史の研究を始められたのが、大体一九三五年ごろ、四〇歳の頃であります。

そこから後、先生の業績をずっと見ていきますと、ちよつと信じられないような多産な論文の数です。先ほ

ど申しました『三田学会雑誌』であるとか、あるいはわ
ずかではありませんけれども、この『史学』にも投稿され
ております。それから、野村先生が創立されました社会
経済史学会の機関誌である『社会経済史学』という学会
誌、これはいまでも続いておりますけれども、そういう
学術雑誌、それからついに野村先生自身で慶應義塾の
中に経済史関係のスタッフを揃えて、慶應義塾経済史学
会というのを創設されました。これは戦争で中断され
てしまいましたけれども、数年間は『歴史と生活』という
先生の歴史に対する考えを象徴するような題をつけた雑
誌を出されています。

私が勘定しますと、一番多い年は一九四一年でありま
すが、その年には実に二十八編の論文を出されています。
二十八編というと、月に二編か三編ですから、ちよつと
これは信じられない数です。私はいまどんなに頑張つて
も年に二、三編書くのがやつとでありまして、それだけ
私が高才なのかもしれないけれども、とにかく大変な
量であります。

それらを通して言えることは、一口にして云えば実証
主義に徹しておられたということではないかと思えます。
恐らくこの時期、野村先生は、先ほど来お名前のお出で

ります幸田先生との交流が大変深かったということを、
私も直接野村先生を通じて聞いておりますし、あるいは
高村先生を通じても聞いております。先ほど林先生は、
幸田先生は農村のことはおやりにならなかつたと言われ
ましたけれども、まさに幸田先生のおやりにならなかつ
た農村の部分にだんだん関心を集中されました、史料を
集め、そして『五人組帳の研究』であるとか、『村明細
帳の研究』というような本に結集されますような、史料
の収集とその分析を中心に研究を続けて行かれたわけで
あります。

野村先生の学問については、もちろんいろいろな立場
からの批判がかなりあります。資本主義の成立を商人資
本とか商業資本に求めるという立場は、東京大学の大家
久雄教授によって批判され、商業資本を否定する産業資
本こそが資本主義成立の基本だという考え方が非常に有
力になってきますと、野村先生のような考え方は、どち
らかというとマイノリティになっていったわけでありま
す。余談ですが、ある機会に私が生意気にも大塚先生に
私の目標は大塚先生を越えることだと申しましたところ、
大塚先生は、自分の目標もあなたの先生の野村先生
を越えることでしたと云われ、さすが、と思つたことが

あります。

それからまた、野村先生の持っているオールド・リベラリズムというか、これが時代ですね、戦争直後のあの時代において、ある意味では時代を大きく変革しようという人たちとの間に、一定の距離をつくってしまつたというような不幸なこともございました。

そういうわけで、批判もありましたし、また先生自身、そういう世の中の動きに反感を覚えられまして、晩年は大変ご機嫌が悪かつた。私どももしょっちゅう怒られてばかりいまして、しまいには怒ることがないといつて怒られたくらいなのですが、(笑) そういうわけで、なかなか寄りつきにくい存在になつてしまつたという点もあります。幸田先生とは違って、直接のお弟子には余り恵まれなかつたと云えるかもしれません。私のような者が辛うじて最後の一人としていゝることになります。実は私自身も学生の頃は、野村先生というよりは、これからお話をしようとする高村先生の研究会を出たのであります。二人の師匠を持ちまして、よくぞ押しつぶされないで済んだというように思っております。

そのように、野村先生は、イギリス経済史に始まり、思想史を経て、日本経済史における非常に大きな業績を

残され、特に江戸時代の農村史に関しては、野村先生の築かれた業績の上にわれわれはいま乗つかつて進んでいるという感じを強く持っているものであります。

野村先生はちょうどいまから三十年前に亡くなられたわけなのですが、高村先生はつい昨年亡くなられたばかりでありまして、その学問の全体像というものをまだ私は十分見通すことができないのでありますけれども、やはり高村先生の口からも幸田先生のお名前を何回か聞きましたし、高村先生の著書の中にある『日葡交通史』(一九四二年)などは、恐らく幸田先生との出会いの中で生まれたものではないかと考えております。高村先生は中世ドイツ・ハンザ史および中世から近世にかけての都市史の研究者として著名でありますけれども、やはり手堅い実証主義的な立場からの研究を貫かれた方であると言つていいと思います。

もう時間もありませんので、一つのことだけ、野村、高村両先生をはじめ、史学科の先程来お名前のお出でいらつしゃいます先生方が塾に対して寄与されている点でわれわれがその恩恵に浴していることをどうしても強調したいのであります。

それは何かと申しますと、田中先生は例の田中文庫を

図書館にちゃんと残しておられます。日本において歴史学が、伝統的な中国生れの史学とヨーロッパ史学の出会いの上で成り立った過程を私達はこの文庫の蔵書を通して学ぶことができます。それから幸田先生は図書館に、ご自分で蒐集されました古文書、これは大体商業史料が多いのですけれども、これを残しておられます。これは古文書ですから世の中にそれぞれ一点しかない貴重なものです。いまわれわれはどれだけその恩恵に浴することができるか。ほかのどこにもないものを慶應義塾の図書館は持っているのです。野村先生は同じように、ご自分の蒐集されました農村史料が主ですけれども、あるいは武家、あるいは一部商家の文書も入っていますが、そういう文書を全部やはり慶應義塾に寄贈されました、これは現在慶應義塾にあります古文書室のいわば核になっています。古文書室にはそれ以外、文学部のほうで蒐集された史料もお預かりしているわけでありますけれども、特に関東地方の農村に関しては、慶應義塾の古文書室は、東京にある各大学の古文書室のどこよりもたくさん史料を持つております。私がおこにりましたときは、関東地方の地方史研究、地方史の編纂者の間で有名になつておりまして、訪れる方も多く、その応接にいささか疲

れたということもあつたぐらいであります。それから高村先生の蔵書もまた、慶應義塾図書館が引き継いで、ドイツ・ハンザ、あるいはドイツ中世史に関する、日本に一点しかないような貴重な財産が慶應義塾にあるということにもなつております。われわれ後輩は、そういうよき先輩を持ったということを肝に命じて、その先輩を乗り越えることはできないまでも、最大限の努力をすべきであらうというふうに考えております。

以上、大変まともらないお話になつてしまいましたけれども、塾の持った先輩への感想と感謝を述べさせていただきます。

司会 どうもありがとうございます。野村先生という方は大変こわい先生だという噂は、私の学生時分からよく聞いておりましたけれども、いま直弟子の速水さんもやはりこわかったそうでありまして、晩年は余り近寄れなかつたというお話まで伺いました。

ちようどこここで、二時から始まりましたこの会も二時間たちました。皆様方もお疲れと存じます。ここで五分ほど休憩をいただきまして、四時十五分から、次のお話を伺おうと思ひます。